

「あなたに伝えたい 伊予灘ものがたり」思い出エピソード
審査結果について

2021年12月1日

観光列車「伊予灘ものがたり」ラストランイヤー特別企画『「あなたに伝えたい伊予灘ものがたり」思い出エピソード募集』につきまして、審査委員による最終審査の結果、最優秀賞ならびに優秀賞が決定しましたので、以下のとおりお知らせいたします。

1 応募作品

応募総数 30 作品（1次審査通過 15 作品 2次審査通過 8 作品）

2 最優秀賞作品

(1) タイトル

「家族を繋いでくれた伊予灘ものがたり」【季節：夏】

(2) 応募者

愛媛県八幡浜市在住 20代女性

(3) 作品

これは伊予灘ものがたりと祖母そして愛犬との大切なひと夏のお話です。

6月下旬のある日7周年記念運行に「千丈のわんちゃん達」としてご招待の連絡がきました。そんな中、4匹のうち最年長のルイは高齢により体が弱っていて先はそう長くありませんでした。ただ伊予灘ものがたりが通過する時間には必ずお見送りをしていました。

その後残念ながら運行7周年記念を目前に息を引き取りました。

7月26日記念運行当日、列車内で流れたあるアナウンスに私と祖母は感動しました。

「7年間お見送りに努めてくれたルイちゃんが先日息を引き取りました。感動をありがとう。皆様天国のルイちゃんに感謝を込めて拍手をお願いします」

列車内では拍手の音が鳴り響き、様々な思いがこみ上げ胸がいっぱいになりました。そのとき隣で大粒の涙をこぼす祖母の姿が印象に残っています。

感動を与えてくれ家族を繋げてくれた伊予灘ものがたりには感謝の気持ちでいっぱいです。

(4) 審査委員からのコメント

伊予灘ものがたりアテンダントと沿線地域の方との強い結びつきを感じられる作品。

いつもご自宅のベランダからおばあさまと一緒にお見送りをしていただいていた犬のルイちゃんに感謝を伝えたいというアテンダントの想いとサプライズに感動しました。また、おばあさまの大粒の涙は、ルイちゃんへの想いと伊予灘ものがたりへの感謝とも感じられ感慨深かったです。まさに伊予灘ものがたりのチーム力を感じられる作品であり、満場一致での最優秀賞の受賞となりました。

3 優秀賞作品

最終審査の結果、優秀賞は以下の5作品となりました。(別紙参照)

「夏の大洲城」	【季節：夏】	(兵庫県 40代男性)
「忘れもしない2014年8月11日」	【季節：夏】	(愛知県 50代女性)
「秋の金婚式」	【季節：秋】	(香川県 50代女性)
「紡いでいく、ものがたり」	【季節：冬】	(東京都 30代女性)
「赤橋の思い出」	【季節：冬】	(神奈川県 50代男性)

4 作品の公開

最優秀賞、優秀賞を含む応募作品につきましては、準備でき次第伊予灘ものがたり公式HPに掲載いたします。

【別紙】 「あなたに伝えたい 伊予灘ものがたり」優秀賞作品 一覧

タイトル	夏の大洲城	季節	夏	審査委員コメント
	<p>「伊予灘ものがたり」で肱川を渡る時の楽しみが大洲城の天守と「はたふり」。</p> <p>いつか参加したい、と思っていたが、昨年7月、歴史好きの息子を誘い、大洲城へ。「伊予灘ものがたり」の通過に合わせ、お城の方がのぼり旗を準備、城を訪れた人々をはたふりに誘う。この日の参加者は総勢13人。列車が来る前に軽く練習。</p> <p>風もあるなか、背丈より大きなのぼり旗をふるのはなかなか難しい。額には汗がにじむ。伊予大洲駅を発車した列車が見えると、お城の方の「みーぎ、ひだーり」のかけ声に合わせてみんなでのぼり旗をふる。練習のおかげで息もあってきた。橋梁上を徐行する列車のミュージックホーンがかすかに聞こえる。車内で乗客が手を振っている様子が思い浮かぶ。何とも不思議な一体感。</p> <p>城をあとに、伊予大洲駅へ。「道後編」の車中、じゃこ天をつまみながら私は地ビール、息子はみかんジュースで乾杯。夕暮れの伊予灘を眺めながら、心もおなかも満たされた素敵な1日だった。</p>			<p>大洲城での旗振りも伊予灘ものがたりの風物詩ですね。「みーぎ、ひだーり」と、お城の情景が目につくかぶ好作品であり、親子での鉄道旅の様子が微笑ましく感じられます。</p> <p>(鉄道フォトジャーナリスト 櫻井 寛 様)</p>
	<p>忘れもしない2014年8月11日</p>			
	<p>小雨が降る中下灘駅に到着。ホームには大勢の人。優越感に浸りながら時間も忘れ写真撮影。ふと戻ると目の前を電車がゆっくり走り出した。</p> <p>「えっ!?!」「嘘でしょ!?!」そうです、乗り遅れたのです。20mぐらい進んで停車。乗務員さんがすぐ来てくださり「気を付けて走ってください」と。私は必死に走った。しかし途中乗車は出来ずホームへ逆戻り。</p> <p>生きた心地がしない中「ふくいさーん!車ですってくれますか?」と。「何!?!」ボランティアのご夫婦が「大丈夫だよ、心配しないで」と車で長浜駅まで送って下さり最後には「楽しんでね」と。無事乗車でき皆様は頭を下げて詫言いました。こんな私に「よい旅を!」「少しでも長く乗車できてうれしい」と言葉を掛けて頂き、私は涙が止まらず胸いっぱい。</p> <p>大洲城から感謝の旗振りを力いっぱいしました。</p> <p>私は言いたい。この鉄道は愛があふれすぎ日本一です。</p>			<p>乗り遅れてしまったというアクシデントも、地域の方の素晴らしい対応によって心温まるドラマになっており、伊予灘ものがたりと沿線住民のチームワークが感じられる作品でした。</p> <p>(PetitParis オーナーシェフ 近藤 和之 様)</p>
	<p>秋の金婚式</p>			
	<p>この列車でお祝いでいただくのは2回目です。1度目は子供の誕生日。転校してきて環境に慣れない息子を元気づけたくて、大好きな伊予灘ものがたりに乗った時です。手作りのハガキをいただき、皆さんからのお祝いは忘れられない1日となりました。</p> <p>あの日から6年、高校生になった息子からお世話になっている祖父母の金婚式を伊予灘ものがたりでお祝いしようと提案がありました。「僕も嬉しかったからきっと喜ぶよ!」こうして内緒の松山旅行が始まりました。驚かせるためにアテンダントさんにごっそりお願いし、メッセージを読んでいただいて心のこもった手作りのプレゼントまでいただきました。もちろん料理も美味しく、途中の沿線の方々との触れ合いや下灘駅での記念写真等、暖かい歓迎に祖父母が喜ぶ姿を見て本当に乗って良かったと思いました。</p> <p>いつかまた、家族みんなで伊予灘ものがたりに乗れたらいいなと計画しています。ずっと走り続けてください。</p>			<p>伊予灘ものがたりでの思い出と感動を祖父母に伝えたいというお孫さんの優しい気持ちを感じられる作品です。母から息子へ、そして息子から祖父母へと想いが繋がっていく様子を胸をうたれました。</p> <p>(ホテル椿館取締役 宮崎 雅子様)</p>
	<p>紡いでいく、ものがたり</p>			
	<p>今でも、目を瞑ると、青色の海、水平線に沈み始めたサンセットに照らされた 茜色と黄金色の電車を思い出す。その日は、少し肌寒い2月の中旬でした。</p> <p>「まもなく、下灘駅に到着をします。」</p> <p>目の前に広がる海と、沈み行くサンセット。その日はテレビカメラや乗客以外にも下灘駅には多くの方が皆さん、カメラを構えて、下灘駅と列車の写真撮影が始まっていました。</p> <p>こっちおいで、綺麗なよと呼ばれ電車の後方から電車と沈み行くサンセットを二人で眺めました。</p> <p>「結婚してほしい。」</p> <p>少し恥ずかしがり屋な彼、人混みの中での、小さな声でのプロポーズ たった10分の停車時間の中での出来事。車内に戻った後、思った、電車が好きな彼らしいなと。松山駅に到着をし、彼に伝えた</p> <p>「次は、三人で乗ろうね。」</p>			<p>おふたりの貴重な人生のひとつと伊予灘ものがたりが結びつき、最高な物語の一編を見せてもらいました。人混みの中でありながらも、二人だけの空間でのプロポーズ、とてもロマンチックで素敵です。</p> <p>(砥部焼女性作家グループ「とべりて」代表 山田 ひろみ様)</p>
	<p>赤橋の思い出</p>			
	<p>7年前の12月、父との旅行で伊予灘ものがたりに初乗車したのですが、乗車直前に些細なことから大喧嘩をして最悪な雰囲気でお城から道後編に乗り換えました。</p> <p>発車してすぐに窓の外には収穫時期を迎えた柑橘系のオレンジ色が一面に広がり、夕暮れ時の大洲城や肱川の景色を見て、いつの間にか雰囲気も和んだ頃に、母の生まれ故郷である長浜の「赤橋」が見えてきました。既に日没の時間でしたが久しぶりに赤橋を見て、「よくお母さんが赤橋の話をしてくれたね」と30年前に亡くなった母の思い出話にも花が咲きました。</p> <p>そして父が一番喜んだのは、その日に83歳の誕生日を迎えた父をアテンダントの皆さんが集まってお祝いメッセージカードを頂いたことでした。</p> <p>懐かしい景色を見ながらアテンダントさんの温かいおもてなしを受けて、伊予灘ものがたりの旅は本当に忘れられない思い出になりました。</p>			<p>親子喧嘩を車窓の美しい景色が和ませてくれる様子がよく伝わってくる作品です。「父との旅」と「母との思い出」に伊予灘の風景が溶け込み映画のワンシーンのように感じられました。</p> <p>(JR四国 常務取締役 藤本 聡)</p>

※原文をそのまま引用しています。